

相楽らの犠牲の上に成った維新の後、
日本は彼の思っていたような国にならなかった。

相楽らの犠牲は何だったのだろう。

そのことが彼の良心を咎める。

そして、維新後、彼の能力を最大限に発揮しなくてはいけない、
最も大事な時期に何か思うに任せなくなると、
この心の傷(良心の呵責)がひよいと顔を出す。

大久保をして
「まったく、うどさんときたら・・・すぐ放り出すんだから」
と嘆かせる西郷になってしまうのである。

あれほどのビッグが、赤報隊事件程度のことで
人変わりするほど急激に無気力になってしまう。

この話は勝部真長氏の推論なのだが、
西郷の人変わりの主要因の一つがこれだとすれば
「彼には行政能力は無かったんだ」などという理由よりも
遙かに説得力がありはしないだろうか。

**そして、それが西郷の政治家としての限界なのだろうが、
自分は「純粹さ」「正義感」「勇氣」といったメジャーな資質と共に、
この「弱さ」、そして「優しさ」という感情を多量に持った西郷に、
限りない親しみと敬意を感じる。**

駆け足で西郷の半生を追ってきたが、
維新後、西南戦争までの経緯は彼に魅力を付加した時期と言うよりも、
魅力発露の時期にあたると思われるので書かない。

征韓論などその時期に関心のある方には
司馬遼太郎氏の小説「翔ぶが如く」をお勧めしたうえで、
「西郷は、その魅力を、何時、どこで身につけたのか」の
自分なりの結論に移りたい。